

平成 26 年 5 月 26 日

東大阪市市長
野田義和 殿

一般社団法人 日本建築学会
近畿支部支部長 小坂郁夫



東大阪市旭町庁舎の保存活用に関する要望書

拝啓 時下ますますご清祥のこととお喜び申し上げます。

平素より、本会の活動につきましてご理解とご協力を賜り、厚く御礼を申し上げます。

さて、貴市におかれましては、東大阪市旭町庁舎を建替える計画である由、新聞等の報道により聞き及んでおります。

東大阪市旭町庁舎は、別紙「見解」に記しますとおり、枚岡市庁舎として 1964（昭和 39）年に竣工したもので、設計は日本の近代建築を牽引した建築家の一人である坂倉準三率いる坂倉準三建築研究所によるものです。生駒山の間近に立地する環境に対して、打ち放しの鉄筋コンクリートによる大胆な造形で応えたモダニズム建築であり、戦後、日本各地で計画建設された、新しい時代の市民に開かれた庁舎建築のなかでも代表的な建築作品と評価されています。

当該建物は、2001 年に芦屋市立美術博物館で開催されました「関西のモダニズム建築 20 選」において、関西を代表する優れたモダニズム建築の 1 つとして選定されているなど、すでにその価値が認められているものです。

貴市におかれましては、その価値を十分に認識され、かけがえのない文化遺産を保存し、後世に継承していただけるよう、深甚なるご配慮を賜りたく存じます。

なお本会はこの建造物の保存に関して、技術的支援など、できます範囲でお手伝いさせていただきますと考えておりますことを申し添えます。

今後ともこの優れた建造物と環境の保全に、ご協力とご理解を賜りますよう、お願い申し上げます。

敬具

平成 26 年 5 月 26 日

東大阪市旭町庁舎についての見解

一般社団法人 日本建築学会近畿支部
近代建築部会主査 榎原 人



・建物の概要

東大阪市旭町 1-1 に所在する東大阪市旭町庁舎は、1964（昭和 39）年に竣工した鉄筋コンクリート造地上 4 階一部中 1 階の庁舎建築である。竣工時は延べ面積 4,400 m²の規模であった。設計は坂倉準三建築研究所大阪支所で、坂倉準三および大阪支所の所長西澤文隆のもと、所員の東孝光が設計を担当した。

当該建物は、1955 年に発足した枚岡市の庁舎として建設された。しかし 1967 年に枚岡市は布施市、河内市と合併し東大阪市となった。2003 年に東大阪市庁舎が新築された後、当該建物は東大阪市旭町庁舎となり、現在、図書館や保健センター、行政サービス窓口として利用されている。

建物は内外ともに、竣工当時の打ち放しの鉄筋コンクリートのままの姿で現存している。屋内では竣工後、改修された部分も見られるが、廊下に面したガラス窓やドアのサッシも、竣工当時のまま残されている部分がある。当時の市議会議場は、現在は倉庫として使われているが、その空間は現存している。全体的には、竣工当時の姿をよくとどめている建物だと言える。

・戦後のモダニズム建築としての価値

東大阪市旭町庁舎は、1955 年に発足した枚岡市の念願の新庁舎として建設され、1964 年に竣工した。1950 年代後半から 1960 年代にかけて日本各地で庁舎が建設されたが、戦後の新しい時代に相応しい庁舎のあり方が求められていた時期でもあった。枚岡市庁舎もそれに応えようとした建物の一つで、庁舎には門も塀もない。

外装はすべてコンクリート打ち放し仕上げで、3 階・4 階には深いバルコニーがめぐらされ、反りの付いた屋根庇が全体をまとめている。正面玄関は生駒山に向かい、車寄せの庇も大きく張り出している。屋根庇は 5m のキャンティレバー（片持ち梁）で支えられており、重量感のあるコンクリートという素材を使いながら、軽やかな印象を与える造形が特徴的

である。

低層部には市民が訪れる窓口などが配され、3階は市長官房、4階は議場と議会関連諸室となっている。矩形の平面にコンパクトにまとめられ、機能的であると同時に、開口部からの変化に富む風景も考慮したていねいな設計がなされている。昇降に利用する主階段は優美な螺旋階段で、空間構成上のアクセントとなっている。

合理性を追求すると同時に、コンクリート打ち放しという殺風景で単調になりがちな素材を用い、変化と軽やかさのある造形を実現し、また構造的に大胆な造形を試みた点において、戦後モダニズム建築の代表作と言える。

・坂倉準三の建築作品としての価値

設計を担当した坂倉準三建築研究所は、日本の近代建築を牽引した建築家の一人である坂倉準三（1901-1969）が主宰した建築設計事務所である。坂倉は、戦前期に近代建築の巨匠と呼ばれるフランスのル・コルビュジエの事務所に勤務し、帰国後に日本で建築設計事務所を主宰した。1937年のパリ万博で日本館を設計し、パビリオンの設計競技において1等賞を受賞するなど、国際的にも高い評価を受けた建築家である。一貫して抽象的な形態や打ち放しコンクリートを用いるなど、モダニズムの方法で建築の設計に取り組んだ。戦後は、公共建築を中心に、オフィスビルや住宅など多数の優れたモダニズム建築を生んだ。坂倉の建築設計事務所には大阪支所があったことから関西にも多数の建物を残している。

また坂倉の事務所である坂倉準三建築研究所に在籍した所員から多くの建築家が輩出され、日本の近代建築に大きな影響を及ぼした。坂倉準三と大阪支所のリーダー西澤文隆のもとで、当該建物の設計を担当した東孝光は、設計当時弱冠30余歳であった。東は1966年に竣工した自邸「塔の家」の設計を手掛け、その後独立して建築設計事務所を主宰し、打ち放しコンクリートと都市型住宅に早くから取り組んだ建築家として知られている。

当該建物は、ル・コルビュジエ風のデザインの特徴を随所に見せ、小規模ながらも全体は力強い造形でまとめられている。坂倉と所員の個性が調和した、坂倉建築研究所らしい建物だと言える。

・立地環境に呼応した建築造形

旧枚岡市は東大阪市東部にあたり、当該建造物は生駒山の麓に立地する。設計にあたっては、敷地周辺の条件にとどまらず、市域と庁舎の関係、また生駒山との関係が考慮された。建設時、4階建の建造物は周辺には見当たらず、位置的にも視覚的にも「まちの中心点」

とすることが企図された。大きな屋根庇や最上階の議場の形態が表れた屋上の階段状の特徴的な造形によって、さまざまな方向からも市庁舎を視認でき、ランドマークとしての役割を果たしていた。『建築と社会』1964年6月号には、市庁舎から生駒山山上までの広域の断面図が描かれており、生駒山との関係を深く考えながら設計したことを読み取ることができる。竣工時の写真では、正面玄関に建つと生駒山が眼前にひろがり、諸室の窓からは市内の各方面が見渡せる様子が示されている。

現在は周辺状況が大きく変わり、竣工時のように庁舎の視認性は高くないが、ランドスケープを考慮した設計は今日にも通用するものであり、当該建造物の特質として価値あるものと言える。

・戦後建築の価値と保存活用について

1960年代の建造物は築後50年ほどしか経過していないことから、まだ歴史的な存在と見なされず、実用性のみで判断されることも多い。だが、戦後復興期から経済成長期の社会のあり方やニーズを具現化したものであり、若くとも歴史的な存在である。世界的にも戦後建築の保存活用は、近年、議論されるとともに実践されつつある。

世界遺産の登録などを行うユネスコ(UNESCO)の諮問機関であるイコモス(ICOMOS)は、2011年6月に「マドリッド・ドキュメント」を採択した。その中で、鉄筋コンクリート造の建築を中心とした20世紀の歴史的・文化財的建築について、「リビング・ヘリテージ」という概念によって、積極的に活用し使い続けていくことによる「保存」を提言している。戦後建築の文化財的価値もこうした考えにより、世界的に認められつつある。

1967年、枚岡市は、布施市、河内市と合併し、東大阪市が発足した。東大阪市の新庁舎が2003年に竣工するまでは、当該建物は引き続き庁舎として利用され、その後は、保健所や図書館、行政サービスセンターとして利活用されてきた。合併により市域も大きく変化した。これまでの歴史を語る上でも、旧市の庁舎の存在は有意義と考えられる。

一方で、公共建築に求められる耐震性を確保するためには、適切な補強が求められる場合が多い。当該建造物も、耐震診断の結果、相当の補強工事が必要と判断されたと聞く。耐震補強に関しては、さまざまなアプローチがあり、多角的に検討することで、建築遺産としての保存と今日の市民のニーズへの対応の両立が可能になる場合が多い。また市民が日常的に利用する公共施設として使われた実績があり、市民にも親しまれてきたと言える。施設の老朽化や経年による陳腐化にも対処することが必要であるが、耐震補強と同時に、抜本的な設備の更新を行ない、今日求められる施設へ大胆な用途変更を行うことも可能である。「若い建築遺産」としての旭町庁舎の特質が保たれた利活用が期待される。